

四季錄

高校2年生の夏の初めから秋にかけて、私は学校の敷地の隅で石を彫っていました。毎日授業が終わつた後、暗くなるまでの時間でしたが、この経験が私に作品を作る面白さを教えてくれたのです。鉄の一寸鑿を石に当てて、石用の槌「セットウ」でたたいて彫ると、石が砕けかすかな煙が出て、石と鉄が焼けたような匂いがしました。そして、辺りが薄暗くなつてきたり、火花さえ見えたのです。このような現象が、私が石をたたくたびに起きました。それは、当時の私が17年間の人生で初めて味わう経験として私の心に刻まれました。

そこには私と、石と、周りの空間しかなく、たたく一瞬がそのたびに五感に印象深く刻まれ、その時間が積み重なつて、永遠に続していくかのような感

覚をもたらしたのです。私はこの不思議な時間を過ごすことが好きになつていきました。同時に世界に私が一人だけであるようにも感じました。「増本ちゃん、何しようと（何しているの）？」とほかの部活の友達に声をかけられるとときもありましたが、「石ば、彫りよるとよ」と言ふと「ふうん、頑張ってね」と

私の師匠の話(2)

言つて通り過ぎて行きました。
そしてまた一人になつても少し

言つて通り過ぎて行きました。
そしてまた一人になつても少し
も寂しくはありませんでした。
私は石彫を教えてくださった
美術の先生は、時々様子を見に
来られましたが、特に細かい指
導はありませんでした。ただ、
私がシンメトリー（左右対称）
に見えるように石の作品の顔の
表情を右と左で同じようにしよ

うと彫っていた時に「左右で同じやつたら動きが出らんからこそ、目の大きさやらは変化が出来るようにしんしやい」と教えてくださいました。彫刻作品は通常動くことはありません。でも、動かないはずの作品を、あたかも生きて動いているように感じ



させることが芸術です。その一つが、「この時先生がおっしゃつた「あえて左右を非対称として表現する」ことでした。これは今でも私の美術の授業の中で、恩師から教わった大切なこととして私の口から出てきます。

は、私たちをおおらかな愛情で包んでくださいました。それは、特別に優しい言葉をかけてください、生徒一人一人の特性を見抜き、その生徒がより自らしき過ぎていいけるような環境を提供することで、長期にわたって見守ってくださるという愛情でした。高校生の時期は幼児よりも経験していることは多く、それだけ物事から新鮮さを感じるのが難しい時期ですが、私は17歳にして大きな感動体験をこの先生から与えていただいたわけです。ずっと後になつて、先生は「後にも先にも、素直に石やらば彫つたのは、お前しかおらんやつたばい」と話してくださいました。光榮なことです。
（増本 達彦・松山東雲女子大教授・彫刻家）